

プレゼンテーション | 学生 → 企業

チーム名 お薬はん

提案 昆虫の可能性を広めることで
人と地球の健康をリードする

人生100年時代の食糧危機を救うのは昆虫であるとし、社員食堂に昆虫食メニューを置くことを提案。メニュー例としてあげた、ミルワームという昆虫をパテに使用した「Insect Burger」は安価、低脂質、低カロリーでありながら多くのタンパク質を摂取できるので、アスリートや減量中の食事のサポートにもなる。将来的には病院や介護施設の食堂への展開も考えられる。

[参加学生] 畑下慶紀、野村早希、尾崎友枝、小丸真由、関口晴斗



チーム名 カルテット

提案 病気や死について学ぶ
お坊さんツアー

人生100年時代に欠かせないことは「病気や死について考えること」とし、「お坊さんツアー」の社員研修への導入を提案。ツアー1日目は、お坊さんと生老病死について話したり、座禅・棺桶に入る体験・Living Willで死について考える。2日目は、病気の体験談を聞いたり、病名を医師から告知される体験・緑内障の視界体験・糖尿病食の試食で、病気になった自分を体験する。

[参加学生] 張浩然、岩倉渉太、竹下はるな、三浦美玖



ノバルティスホールディングジャパン代表取締役社長がプレゼンに参加！
学生たちの健闘を称えた



昆虫は医療にも活用できる



セミの抜け殻の漢方薬への利用、ハエの幼虫を利用して壊死組織を除去するマゴットセラピーなど、昆虫が様々な医療に活用できることも紹介し、参加者の共感を呼びました。



社員は2回も大学を訪れ、
学生たちにアドバイスや
エールを送った



テーマ発表後、早くも
ノバルティス提案の
グループワークを開始



グループワークのタイトルは「製薬業界を取り巻く環境」。「昨今の医療業界の変化」とともに「その変化に対して、あなたが厚生労働大臣だったら何をしますか？」という課題について、グループごとにディスカッションをしてテーマへの理解を深めていきました。

University

Company

PBLを終えて



教育学部
国語国文学科1年
竹下はるなさん

他学部、他学年の方と意見を交換する機会は、ふだんの授業ではないことなので、とてもよい経験になりました。たくさんアイデアを1つの提案にまとめていく過程など、今回の学びを将来の仕事に活かすことができたらと思っています。



人事統括部
ダイバーシティ・インクルージョン室
織笠加奈子さん

まったく方向性の違う2案でしたが、どちらも予想を上回る斬新なアイデアでした。とくに「お坊さんツアー」は社員研修ではなく、むしろ社外向けに実施すれば、当社を一般の方々に知っていただく機会につながる可能性を感じました。

早稲田大学



1882年に大隈重信によって設立された東京専門学校を前身とする私立大学。私学の雄として多くの逸材を輩出し、国内外で卒業生が活躍。

ノバルティス ファーマ



ノバルティスの医薬品部門の日本法人。1997年設立。社員数4,108名(2018年7月現在)。本社(東京)、篠山工場(兵庫)、国内に9つの営業拠点がある。

「人生100年時代」の
製薬会社の取り組みと役割を
自由な発想で考える

世の中を先読みして、製薬会社の
新しいサービスを創造する

世界的なヘルスケアカンパニーの
日本法人として1997年に設立された製薬会社が
「人生100年時代」に貢献できる
取り組みと役割とは？
早稲田大学の学生9人が提案します。



「人生100年時代」を
イメージするワークから開始

ノバルティス ファーマは、スイス・バーゼル市に本社を置く、世界的なヘルスケアカンパニー。ノバルティスの医薬品部門の日本法人で、循環器 代謝、呼吸器 眼科、中枢神経、移植、皮膚 免疫、がんなど、幅広い領域の医薬品を提供しています。
東京・港区の虎ノ門ヒルズ森タワー内にある本社で行われたオリエンテーションでは、1つの新薬が研究から発売までたどり着く確率はわずか3万分の1、要する時間は9〜16年、約1千億円もの費用がかかることが説明され、新薬を生み出すことの困難さが語られました。
その責務を果たすため、ノバルティス ファーマでは、革新的な新薬を世に送り続けるためのイノベーションと、製薬会社として高い信頼を勝ち取るためのインテグリティの実現を目指し、発展途上国に薬を無償提供していることなども伝えられました。

にどんな世の中だったら最高か」を考えるワークを通して「人生100年時代」のイメージを膨らませていきました。
ユニークで好対照の発表と高評価

この後、2チームに分かれ、「製薬業界を取り巻く環境」についてグループワークが開始されました。「昨今の医療業界の変化」についてのディスカッションでは、高齢化などで国の医療費が増大していることや、AIテクノロジーで医療の効率化が図られていることを認識。また、「100歳になったとき」
大学に会場を移して行われた2日目からのワークショップでは、リサーチ結果を発表しましたが、アイデアの量・範囲ともに膨大で収束がつかない状態に。そこで、早くも3日目に社員に足を運んでもらい、アイデアや質問をぶつけました。そこで浮上してきたのが「リカレント教育(学び直し)」や「昆虫」というキーワードです。方向性が絞られると、SNSなどを利用してアンケートを実施するチームも。そうして迎えた5日目の発表には、再度、社員が訪れ、内容がより伝わるポイントなどを指摘、それに基づいて修正が加えられました。
プレゼン当日、ノバルティスホールディングジャパン代表取締役社長、ノバルティス ファーマ執行役員など8人の社員が出席し、1チーム15分の発表に真剣に耳を傾けました。
チーム「カルテット」は、死と病気について考えるプログラムが多数示され、「死について考えることは幸せについて考えることである」というメッセージが伝わってくる、心に響く提案だった」との評価を受けました。また、「お薬はん」は、高タ

オリエンテーション | 企業 → 学生



今後、寿命が100歳前後まで伸びていく「人生100年時代」において、人々がより健康で豊かに生きるためにヘルスケアの果たす役割は大きくなっていきます。同時に、AIテクノロジーの進化により、製薬会社の役割が変化していくことも予想されます。そこで「より充実した、すこやかな毎日のために、新しい発想で医療に貢献する」というノバルティスのミッションを前提として、製薬会社が人々に貢献できる取り組みや、果たすべき役割を自由な発想で提案することが、学生たちに求められました。